

程遠からで、地震ひ山動く、世にある心地にはあらず、夜あけぬれば、きのふをもひしにはことなりて、山かづら引渡せる間に、朝日の影いと花やかなり、夜半のわびしさ引かへて、心いさめり、とく起出てもゆるところにいたる、大なる穴あり、是をみかど、いふ中のみかど、北のみかど、法性崎と名付く、都合三が所なり、當時さかんにもゆるは法性崎なり、たとへばふいごの口のごとし、黒煙天を覆ひ、時々火出て、其音のおびたゞしき事、只今此山みぢんに碎る心地す、其勢ひは筆に書つくすべくもあらず、亥ばし見居たれど、我身も山とともににくだけさるべき心地して、あくまでも、みづくしがたし、少し下れば大なる堂あり、内に額あり、壽安鎮國山と書り、是はもうこしの帝より、むかし此山の靈異なる事を傳へ聞給ひて、此五字をもて山を封じ給ひしなり、堂は傾き損じたり、人はもとより住べき所にあらず、むかしは是より下つたに寺院多くありしといふ、すべて絶頂は海濱のごとくにして、硫黃の氣にて白くみへ、石は皆金くその如くにして、土砂ある事なし、しばし下れば土見へ、草ありて、はじめて世界の景色あり、西の方にはるかに雲仙がだけあり、北の方に、豊前の彦山を望ぞむ、其外の眺望は四方の山にへだてたり、此阿蘇の山は、目八分の山四方を圍みて、堤を築きたるごとく連りめぐれる、其真中に此阿蘇山のみ基を別にして、一峯秀たり、奇妙の地形なり、此山の四方のふもとを阿蘇谷といふ、幅貳三里ほどづゝにして、平田あり、唯西の方のみ、少しばかり四方の圍の堤のごとき山きれで川流れ出たり、傳へ云、上古の世は、此地湖にて、阿蘇山はみづうみの中の島なりしが、阿蘇の明神、むかし此國の守なりし時、西の方の山を切り通して水を落し湖を干て田地となせりと、誠に此地の様すを、つらく見るに、湖なりし事虚説にはあらじと思ふ、又人智の古今なき事を感す。

〔日本書紀^七景行〕十八年七月甲午、到筑紫後國御木居於高田行宮、時有[○]僵樹長九百七十丈焉。[○]中爰天皇問之曰、是何樹也、有一老夫曰、是樹者歷木也、嘗未僵之先、當朝日暉則隱^{クス}杵島山、當夕日暉覆^{クス}阿